

第 84 回 鶴見大学図書館 貴重書ミニ展示

「生命のゆりかご、墓場の沈黙」

2022.12.5～12.28

解題

メアリー・シェリー『フランケンシュタイン；現代のプロメテウス』第3版（ロンドン、コルバーン・アンド・ベントレー、1831年）スタンダード・ノベルズ第9号 *フリードリヒ・シラー『招霊妖術師』スタンダード・ノベルズ第10号との合装版

Mary Shelley. *Frankenstein: or, The Modern Prometheus. The Third Edition* (London: Colburn and Bentley, 1831), Standard Novels IX, bound with Friedrich Schiller. *The Ghost-Seer, Part 1*.

メアリー・シェリーの長編小説『フランケンシュタイン』は1818年に初版がロンドンの出版社ラッキングトン・ヒューズ・ハーディング・マーヴァー・アンド・ジョーンズから匿名のまま出版された。第2版は1823年に出版され、その際に作者名が記された。今回展示する第3版は1831年の出版で、当時、既刊の小説を改訂の上でシリーズとして出版していた「スタンダード・ノベルズ」の第9号として出版された。

第3版はそれまでの2版とはいくつかの点で大きく異なっている。まず、扉とタイトルページに主要な登場人物の挿絵（銅版画）が入った。特に興味深いのは扉ページに描かれた「怪物」の姿であろう。人造人間として、物語の設定では遺体から集めた筋肉や血管ひいては繊維を継ぎ合わせて創造されたことになっているが、この版画のクリーチャーには縫合の跡はなく、むしろよく発達した筋肉と大きな目が際立っている。タイトルページにはインゴルシュタット大学に入学するためにジュネーブの実家を旅立つヴィクター・フランケンシュタインと、彼の旅立ちを悲しむエリザベス・ラヴェンツィアの姿を捉えている。

第3版にはさらに、作者自身による「まえがき」が加えられた。ここでメアリーは、物語誕生のいきさつを、夫の手になる序文よりも詳しく書き記している。その「まえがき」によると、物語の発端は夢であった。若い科学者が生命の創造に成功するが、成功した途端にその生命を遺棄してしまう。しかし、「生命のゆりかご」たる創造物は「墓場の沈黙」に飲み込まれるであろうという科学者の見込みは外れた。ある日科学者が目を覚ますと、枕辺に創造物が佇み、自分を見ていたのである。自らの創造物に「取り憑かれた」創造者の夢は、メアリーに取り憑いて離れなくなった。このようにして『フランケンシュタイン』は生まれた。

第3版にはもう一点大事な点がある。作者が小説本文に手を入れている点である。過去の2つの版はメアリーの夫（ロマン派の詩人として有名なパーシー・シェリー）が序文を寄せたほか、校正も作者本人ではなく夫が行い、その際に作家に断りなく本文を修正した。従って、最終的に作者の意向が反映されているという意味では、初版よりもむしろ第3版の方を重視する傾向がある。現在、印刷・出版されるのはもっぱら第3版であり、翻訳の底本とされることも多い。

なお、第3版は単独ではなく「スタンダード・ノベルズ」シリーズの一部として同時に出版されたドイツの文豪フリードリヒ・シラーの『招霊妖術師』（パート1もしくはは

パート2。本学所蔵のものはパート1のみ)と合わせて装丁されていることが多い。これは2冊が抱き合わせで出版されたためだと思われ、そのことはシリーズものの表紙からも確認できる。

現在のシラーはゲーテと並ぶドイツ文学の重鎮であるが、1789年に出版した本作(原題: *Der Geisterseher, Aus den Memories des Grafen von O***)は当時流行の通俗的な「恐怖小説」あるいは「ゴシック小説」である。シラーはこの作品で大当たりをとった。さらに本作は、ただ商業的に成功したというだけではなく、そのジャンルで一目置かれる作品だと言われている。なぜなら、本作の大成功を契機としてドイツでは「堰を切ったように次々と多彩な性格の」ゴシック小説が現れたためだ(亀井 12)。ジャンルの発展に一役買った記念碑的な作品なのである。

その英語訳は1795年に第1部のみの翻訳が *The Ghost-seer* のタイトルで出版され、1800年には第1部・第2部を合わせた翻訳が *The Armenian: The Ghost Seer* のタイトルで出版された。スタンダード・ノベルズに収められたのは後者の翻訳であるが、タイトルは *The Ghost-Seer* が採用された。

エラズマス・ダーウィン『自然の殿堂もしくは社会の起源：詩と哲学的省察』(ロンドン, J. ジョンソン, 1803年)

Erasmus Darwin, *The Temple of Nature; or, The Origin of Society: a poem, with Philosophical Notes* (London: J. Johnson, 1803).

ダーウィンの死の翌年に出版された。その進化論的思想において注目すべき詩。原子の地球において混沌とした環境の中で原始的生物が発生し、次第に複雑多様な生物に発達してゆくという進化論的な生命感を表している。ワーズワースを含めて、フランス革命後の知識人たちの間では、聖書の創世記中の神による天地創造は、もはや「文学的な喩」にすぎず、ここにダーウィンが提示する神によらない生命の出現という考え方はすでに広まっていたと考えられる。ワーズワースが読んだダーウィンの『動物学』(1794-96年)の知識は『抒情民謡集』(1798年)のなかでも人間の心理理解として生かされている。(元本学英語英米文学科 田久保浩氏の解題による)

本作は生命をめぐる詩(Canto I-IV)と、その詩に注の形で付けられた哲学的省察(I-XIII)からなる。『フランケンシュタイン』の「まえがき」や「序文」では控えめに言及されているだけだが、生物の自然発生説に触れ、電気や動物磁力への考察を試みる本作およびエラズマスの詩と思想は、メアリーの想像力の磁場の一つであった。

なお、エラズマス・ダーウィンの本業は医師だが、詩作を愛し、自説の多くを詩の形式で発表した。『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859年)で進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンはエラズマスの孫にあたる。

【参考文献】

亀井伸治『ドイツのゴシック小説』(彩流社, 2009年)

シラー, フリードリヒ『招霊妖術師』石川實訳(国書刊行会, 1980年)

キング=ヘレ, デズモンド『エラズマス・ダーウィン』和田芳久訳(工作舎, 1993年)